

聖書：マタイ 5：13～16

説教題：地の塩、世の光

日時：2017年12月17日（朝拝）

山上の説教と呼ばれるイエス様の教えを見えています。まず語られたのはキリスト教の幸いについての教えです。3節の「心の貧しい者」から始まって10節の「義のために迫害されている者」まで8つの幸いが語られました。ここを見て思うことは、これらはどんなにこの世が考える幸いと異なっているかということです。これらはクリスチャンに全部当てはまることでした。自分はこの中のどれとどれに当てはまるか？と読むべきものではなく、一つに当てはまるなら他の全部にも当てはまる。クリスチャンとはこういう人たちであるということでした。その者への神からの祝福の宣言が語られました。さて私たちはこれを聞いて、自分はこの世の基準では必ずしもそうでなくても、神の前では本当に幸いな人とされているんだ！と知って喜びと励ましを頂きます。しかしただそのことを喜んでいれば良いわけではありません。その幸いに生かされている者の責任が今日の箇所にも語られています。2つのイメージでそのことが言われています。

まず一つ目は「地の塩」というイメージ。塩は私たちの生活に欠かせないものです。特に料理や食べ物において大事な働きをします。その働きの一つは食べ物の腐敗を防ぐことです。昔は今日のような電気冷蔵庫はありませんでしたから、食べ物は今より腐りやすかったと言えます。そこで人々はどうしたでしょう。人々は塩を使いました。肉に塩をすりこんで長期間、保存できるようにしたり、野菜を漬け物にして野菜が取れない季節も食べられるようにしました。これはこの世について何を語っているのでしょうか。それはこの世は放っておいたらだんだん腐っていく肉の塊のようだという事です。聖書はまさにそのことを語っています。神が作られた最初の世界は「見よ、それは非常に良かった」と言われる素晴らしい世界でしたが、最初の間人が罪を犯して以来、その腐敗の力はどんどん広がりました。アダムとエバの子どもたちの間にはさっそく人類最初の殺人事件が起きました。また創世記6章のノアの時代には、「地上に人の悪が増大し、その心に計ることみな、いつも悪いことだけに傾くのを主はご覧になった」と書かれています。そのためノアの洪水が起きました。しかしそれを経ても腐敗の力は広がり、創世記11章ではバベルの塔の記事が出て来ます。人々は皆で集まり、神に反抗することにおいて一致しようとしていました。そこで神は人々の悪がこれ以上うずたかく積みあがって、この世が最悪の場所とならないように言葉を分断されました。神はこのよう

にして、この後も一般恩恵と呼ばれる様々な方法を通して、この世界が地獄と化さないように支えてくださっています。にもかかわらず、この世は今日も益々悪い方向へ、一層腐敗する方向へ進んでいると私たちは感じずにいないのではないのでしょうか。人々に衝撃を与えるような事件が頻発し、また多様性を容認する風潮の中で道徳的規準はどんどん引き下げられて行く一方ではないのでしょうか。

このような世の中で主を信じる者たちは塩の役割を果たすようにとされています。どのようにしてでしょうか。それはまずこの世の悪と一緒に加わらないことによってです。「赤信号みんなで渡ればこわくない」と言われますが、大勢の人がそうする状況があれば、自分もこの際、渡ってしまえ！とする人が多く出ると思います。しかし時々見かける光景は、そんな流れができていいる中、一人の人が赤信号で止まると後ろを歩いている人たちもそうするという事です。前の人がかちんと止まっているのに、それを通り越して渡るといことがやりにくくなる。その一人の行動が周りにブレーキをかけるといことがあります。しばしば中高生や若者が集団で暴行事件を起こしたといニュースが報道されることがあります。一人一人は必ずしも暴力的な人ではなく、そんな事件を起こすような人には見えなかったのに・・・などと言われますが、人が集まると罪の力も重なり合ってしまい、大事件に発展してしまふ。そんな中、一人違ふ行動を取る人がいれば、全体の行動を大きく押さえることができます。あるいはある場所誰かのうわさや陰口で盛り上がっるといします。私たち人間は他の人の噂や中傷が大好きです。しかし塩の役割を果たすべき主の弟子は、それに乗っかって話すことをしない。私はそういう話は好きではないし、そういう話をしてはならないとい態度を取る。すると間違いなくその場の雰囲気は盛り下がるとい思います。こうして私たちは罪がいよいよ力を奮って悲惨をもたらそうとする場で、それをいくらかでも食い止める働きをすることができるのです。

また塩は腐敗を止めるだけでなく、味を提供することもします。炒め物に塩が適当に入ると美味しくなります。塩は肉や魚のうまみを引き出します。主の弟子はそういう働きもします。人生にスパイスを与え、うまみを与え、喜び・楽しみを与える。世の人たちは自分たちは十分に楽しみを知っていると思っっているかもしれません。しかし伝道者の書で語られていますように、神がその中心にない人生はむなししいものです。どんなに多くの富を得ても、どんなに多くの快樂をむさぼっても、すべての中心にあるべき神がそこに欠けているなら、それは神のかたちに造られている人間を真に満たすことはでき

ない。そんな中、私たち自身が神ご自身を喜び楽しむ幸いに生きることによって、ここに人生の本当のうまみ、豊かな味わい、私たちのたましいを深く永遠に満たす秘訣があるということを世に示して行くことができるのです。

イエス様がもう一つ、今日の箇所で語っているイメージは「世界の光」というものです。これがこの世について語る真理は何でしょうか。それはこの世は暗やみであるということでしょう。この暗やみは罪の闇であり、まことの神を知らないことから来る暗黒と言えます。Ⅰヨハネ1章5節に「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない」と言われています。この神を知り、神との正しい関係に導かれた者として、主の弟子たちはこの光を反映して生きるのです。光はそこにあるものを照らし出します。闇の中に隠れていれば良く分からなかったものを暴き出すこともします。ですからその光は、この世の罪は罪であること、そこにある問題点また汚れを明らかにします。と同時に光は希望を与えます。もし山歩きをしていて道に迷って日が暮れて一切光が見えなかったらどうでしょうか。次の一步をどう進めるべきか、私たちは途方にくれ、絶望的な気持ちにもなるでしょう。しかしもし光が見えて来たらどうでしょうか。民家の明かりが遠くにでも見えて来たらどうでしょうか。私たちは大きな希望を抱いて光の方向へと歩いて行くでしょう。そのように主の弟子は世界の光となって人々に希望を与え、行くべき道を指し示す働きをするということです。

さて、私たちは以上の言葉をどのように聞くでしょうか。地の塩、世の光というイメージは比較的分かりやすいものだと思いますが、一方でこれはとても自分に当てはまらない言葉だと思うのではないのでしょうか。果たして自分に塩気があるかと問えば、とてもあるようには思えない。むしろ13節後半にあるように、何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるというのは私のことではないのか。また光についても自分は次の瞬間には消えてしまいそうな、あまりにも弱々しい光でしかない。世界の光だなんてとてもとても・・・と思うかもしれません。しかし私たちは改めてイエス様の言葉に良く耳を傾けるべきだと思います。イエス様は何と言っているのでしょうか。イエス様はここであなたがたは「地の塩になりなさい」というような言い方をしていません。イエス様は、あなたがたは「地の塩です」と言っています。またあなたがたは「世界の光です」と言っています。これはある特別な人のことではなく、クリスチャン全員を指して言っている言葉です。確かに私たちは完全な状態に達しているわけではありません。不完全なところだらけの者です。しかしイエス様は「です」と言っています。私たちは

このおことばをもとに、自分は今やどういう者とされているのかを良く考え、また受け止めるべきなのではないでしょうか。

私たちはすでに3～12節までを読んで来ました。これは先にも述べましたようにクリスチャン全員に当てはまるものです。私たちは3節にあるように自分の貧しさを知っているのに、そんな者をあわれんでくださる神を知り、神を喜ぶ生活に導かれています。また4節にあるように自分の罪を悲しんでいるのに、そんな者を赦し、受け入れてくださる神を知って慰められています。また5節にあるように神の前にへりくだって謙遜に歩んでも大丈夫なのだと教えられ、そんな者に大きな約束をくださっている神に励まされながら生きています。こういった一つ一つの特性を頂いている者たちです。そのことにおいて私たちはこの世の価値観とは大いに異なる神の国の塩気をやはりいただいている者たちではないでしょうか。光についてもそうです。私たちはイエス・キリストを信じて救われた時、何を感じたでしょうか。それは光の中に入れられたということではないでしょうか。それはまことの光なる神との交わりが回復されたということです。罪が赦されたことを知り、神に受け入れられたことを知り、神とともに歩む永遠のいのちの光の中へ入れられました。このような光はこの世の人々が知らない光です。そういうまことの光を私たちは決定的に知っている者たちです。この事実を私たちはもう一度認めて神に感謝すべきではないでしょうか。

そしてイエス様が言っていることは、私たちはこのような塩気と光とを頂いている自分を隠してはならないということです。ともすると私たちがしやすいことは信仰者である自分を色々な場面で隠してしまうことです。周りの人々と違うことを恐れて自分がクリスチャンであることを言わないし、またまるでそうでない人間であるかのように振る舞う。しかしそれでは意味がありません。塩は塩であって他とは違っているからこそ存在意味があります。そうでなければ役に立たないものとして捨てられ、人々に踏みつけられるだけです。またイエス様は14節で「山の上にある町は隠れる事ができません。」と言われました。クリスチャンはある意味で皆に見られています。神が私たちをそのような者としています。ですからそういう自分を一生懸命隠そうとすることは、山の上の町が必死に自分を隠そうとするようなできない相談であり、また愚かな姿です。ランプのたとえも然りです。明かりをつけて、それを柀の下に置く人はいません。あかりは周りを照らすために、良く見えるところに置きます。神は私たちをそのような明かりとして下さったのですから、私たちはそういう自分を柀の下に隠すようなことをしてはなら

ないのです。神は一人一人をそれぞれの今置かれている場所、その家庭、その職場、その地域を照らすようにと置いて下さったのですから、私たちはそこを照らすあかりとして生きるように努めるべきなのです。

もちろん私たちは自分の不十分さを思います。こんな私に良き証はできるのか。かえって御名を汚すだけではないか。だから引っ込んでいた方がましではないかと。しかしそう言って引っ込むことは、そう歩まなくても良い状況に自分を置くことであり、光を灯さない生活を許容することになります。そしてそのように光を輝かせて歩まなければ、ついには本当に光のない者になってしまいます。この時、語りかけられた弟子たちも、当然たくさん弱さと罪を持っていました。イエス様はそれを知らなかったわけではありませぬ。しかし彼らは神に信頼して生きることを通して塩気や光を発揮することができます。私たちが頂いた塩気や光は、私たちが失敗した時でさえも表すことができます。3節で見た自分の貧しさを認める道、また4節で見た自分の罪を悲しむ道を進むことによって、私たちは神の光を一層輝かすことができますのです。その言葉や行ないに私たちがまことの光なる神と交わって生きていることが現わされ、反射されてくるのです。

最後に心に留めたいのは16節です。「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」ここに私たちの人生に素晴らしい意義が与えられていることが語られています。それは頂いている光を人々の前で輝かせて、これを下さった父なる神の素晴らしさを人々に証しして生きるということです。もちろん私たちはただ人の目を意識して、そうするというものではありません。後に6章にはパリサイ人たちが自分の善行を人々に見せたくて、わざわざ人の前でそれをするという偽善のことをイエス様は指摘されます。彼らはそれを自分の栄光のためにします。私たちはそれとは違います。私たちは人が見ているか見えていなくても、神の前で神がくださった救いに感謝して生きます。しかし同時に、その私の生き方を通して人々が神に思いを向け、神を求め、神をあがめるようになることを祈りつつ生きるのです。それは具体的にどういう生き方なのかがこのあと語られます。次回以降見るのは十戒の正しい解説です。その正しい律法理解に立って歩むことが光を照らすことであり、また神を証しする生き方なのだとということです。

私たちはこのような目的が自分の信仰生活に与えられていることを受け止めている

でしょうか。聖なる私たちの天の父の御名が、この私の生活を通してあがめられるようにと祈りながら生きるのです。これは私たちの勝手な考えではなく、神ご自身が私たちに対して持って下される目的です。私たちは神への心からの感謝をこのような自分の生き方に表して行くように召されています。そのためにはやはり塩気がなくならないように、これを保つ必要があるでしょう。またランプが暗くならないように絶えず整備する必要があるでしょう。光は光なる神から来ます。ですからもし自分の光が暗いと思うなら、神との交わりを妨げているものを取り除き、悔い改め、頂いている明かりがさらに明るく輝くように祈り求めるべきです。私たちが自分の貧しさを正直に認め、へりくだって神に近づいて神とともに歩むなら、神は私たちに豊かに塩気を回復させ、また光の輝きを増させて下さいます。私たちが自分の人生に与えられているこの栄えある使命を悟り、喜び躍り上がって、今日からまた新しく、この使命に生きる人生を神にささげることが出来ますように！神はすでに塩気と光をくださっています。またこれからも絶えず供給して下さいます。私たちはこの神を見上げて祈り、自分を隠すことなく、この貧しい私を通して神を映し出すという栄えある使命に生きて行きたいと思えます。願わくは人々がこれを見て、天におられる私たちの父をあがめることができるように。そして御国がさらに拡がり、御心が地で行われるために神に用いて頂ける最も価値ある人生に感謝をもって進みたく思えます。